●日向国分寺の再検討１

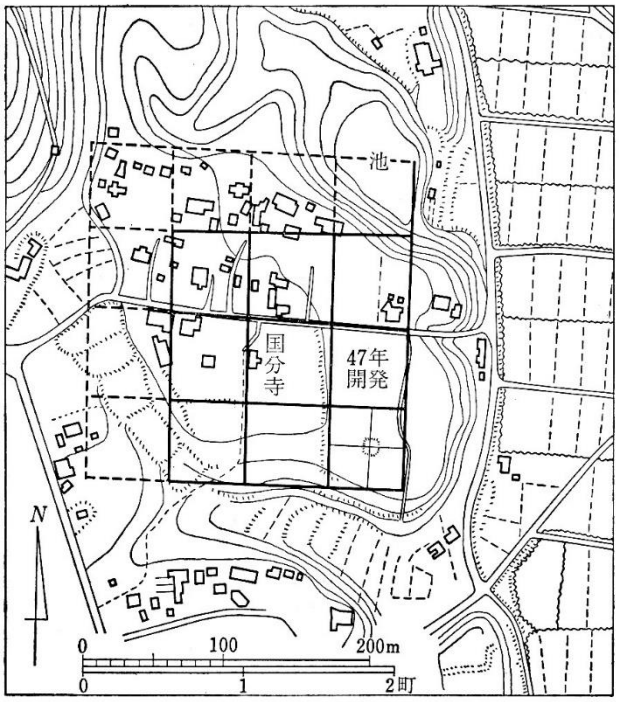
『新修国分寺の研究』所収の論文を史料に再検討する。

日向国分寺跡は、宮崎県西都市大字三宅字国分にある、旧五智山国分寺の境内がそれだと考えられている。

１：伽藍配置と方位

この論文が刊行された時期には、ここでは本格的な発掘はなされておらず、旧国分寺の本堂である五智堂あたりが金堂で、そこに南から至る小道に中門・南大門があり、五智堂に東から至る坂の途中に礎石が古来あって、ここが東門であると言われてきた。

この論文で示されている「日向国分寺伽藍地割想定図」は、このような考え方で作られたものなので、何ら信頼できるものではない。



第198図　日向国分寺伽藍地割想定図

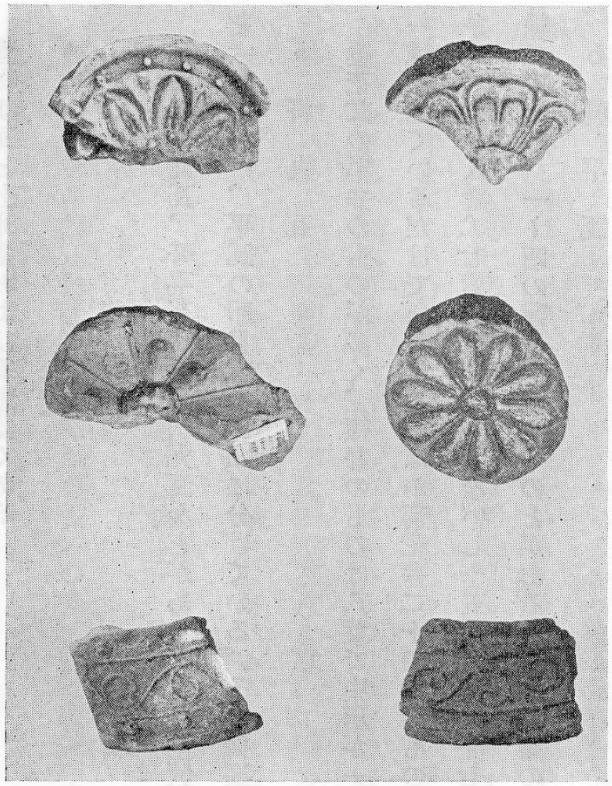
（「日向国分寺伽藍地割想定図」を参照）

また図では伽藍地はほぼ正方位に作られているが、この北が磁北なのか真北なのかの区別も記されていないので、想定される伽藍の方位は、磁北ならば西偏、真北ならばやや東偏

だということだ。

２：出土瓦の状況

この論文に掲載された図版（「日向国分寺出土の瓦当文」）を見ると、上の四つが軒丸瓦、下の二つが軒平瓦である。



第199図　日向国分寺出土の瓦当文
（宮崎県立総合博物館所蔵）

（「日向国分寺出土の瓦当文」参照）

軒丸瓦の文様は

１：上の左：おそらく単弁８葉蓮華文。蓮の花弁が細く、周りに珠文が打たれている。これとよく似た瓦が武蔵国分寺で出土。平城宮系の瓦だ。時代は８世紀中頃。

２：上右：おそらく複弁８葉蓮華文。九州ならば老司式か鴻臚館式の複弁瓦。７世紀中頃だろうか。

３：中左：おそらく素弁８葉蓮華文。蓮花弁間が直線で区切られ全体として扇形。中房に接する部分が膨らんでいる。近畿なら飛鳥寺などで出る瓦とよく似ている。時代は６世紀末から７世紀初頭か。

４：中右：単弁 10 葉蓮華文。本文では菊花弁 24 葉の瓦が出ているらしいが、８世紀の単弁蓮華文⇒平安時代の菊花文に変わる途中のものだろうか。奈良時代から平安時代。

下の二つの軒平瓦は唐草文。上の軒丸瓦でいえば、老司式か鴻臚館式の軒丸瓦に対応した軒平瓦と思われる。

★つまり瓦の変遷から日向国分寺の時代と伽藍の変遷が読み取れる。

１：創建期：素弁８葉蓮華文軒丸瓦　６世紀末から７世紀初頭。
　　伽藍形式：
　　回廊が東西に長ければー飛鳥寺式・観世音寺式・法隆寺式・法起寺式
　　回廊が南北に長ければー四天王寺式
２：瓦葺き替え期：複弁８葉蓮華文軒丸瓦　　７世紀中頃
　　伽藍形式：創建期のまま
３：改造期：単弁８葉蓮華文軒丸瓦　　８世紀中頃
　　伽藍形式：創建期伽藍のままで塔だけ拡大。
　　創建期伽藍を改造して回廊が金堂に取りつく形式で塔が回廊の外に置く形に改造。

３：国府との関係

日向国府は児湯郡にあると史書には記され、国分寺跡がある児湯郡三宅村の国分寺跡のすぐ南 0.6 ㎞には印鑰社があることから、この国分寺近傍付近と古来考えられてきた。

しかしここも全く発掘調査がなされていないので、未確定である。

全体としてこの論文を再検討して気が付くことの一つが、本書の論文の著者は、国分寺とは聖武詔でできたとの思い込みで考察しているので、伽藍形式としては８世紀代の金堂に回廊が取りつき、塔がその外に置かれた形式しか想定していない、ことである。

※調べてみると国分寺も国府もともに、本書刊行後に何度も本格的発掘が行われているので、その報告書を参照して再度再検討することとしたい。

なお日向国分寺の最新の報告書(2009 年刊)『日向国分寺　主要伽藍及び寺域の確認調査』には尼寺と国府のついての最新の知見がまとめられていた。

平成 12 年には国分寺跡の北 1.4 ㎞のところに、９世紀中頃の国府跡が見つかり国史跡に

指定されたが、逆にこのことによって印鑰社周辺に創建期の日向国府がある可能性が高いことが確かめられている。

また日向国分尼寺は、国分寺跡北側 0.7 ㎞にある県立妻高等学校敷地内と考えられ、昭和 63 年度と平成 7 年度に調査のためにグラウンドの発掘が行われたが、尼寺を特定できる遺構は確認されず、校舎下に遺構があると考えられている。

2021 年 4 月 29 日